

『日文研』記念号に捧げるエッセイ

グニラ・リンドバーグ・グワダ

私と日文研との最初のコンタクトは、一九九四年九月に梅原猛先生がスウェーデンとストックホルムを訪れたときだった。ストックホルム大学で講演を行った際、私たちは彼を囲んで気軽なランチョン・セミナーを開催した。その時、日文研の外国人研究員に応募したらどうかと持ちかけられたが、あいにくストックホルム大学よりサバティカルを取ることができず涙をのんだ。

初期には日文研は保守的で国粹的で、たぶん復古的な研究所という印象を持たれていた。かつての国粹的な国学運動に日本研究の歴史的な根っこを見るなら、そのようなナショナルイズム的な見方はさして大げさではないかもしれないが、実際に訪れてみるともちろんその評判がやや大げさであることがわかった。

最初の滞在は二〇〇四年春で、六週間ほど鈴木貞美先生をカウンターパートに外来研究員としての滞在だった。私たちは二〇〇三年のE A J S（ヨーロッパ日本研究協会）ワルシャワ大会で会い、その時にスウェーデン学術評議会が支援する六年プロジェクト「グローバルな文脈における文学と文学史」の一環として、翌二〇〇四年一月にストックホルムで開催する国際シンポジウム「文化横断的な文学史研究」に彼を招いたのだった。京都滞在中にはこのプロジェクトの枠内で書いていた日本の文学史の始まりについての論文を準備した。それは数日間

の観光を除けば初めての京都滞在で、紫式部が見たのと同じ山川をこの目で見られることにぞくぞくした。長年『源氏物語』と『八代集』を勉強したことから、主に想像力の中で広がっていた自然が現実そこにある。日文研の後ろにある山を何時間も歩いたし、ある日には仁和天皇の母君の墓に通じる小道を発見した！

二〇〇七年九月から二〇〇八年八月まで、やはり鈴木貞美先生を受入教員について一年間の外国人研究員として滞在の機会を得た。二〇〇四年に私たちが準備していた論文はデ・グリュテル出版より二〇〇六年に出版された。鈴木先生の論文は『文化横断的な文学史研究』収録の『文学』概念の歴史の変遷と一九世紀後半の『日本文学』の形成、私の『文学史』グローバルな視点をめざして』という編者のなかの収録論文である。このアンソロジーは文学（文芸）の概念、ジャンルとジャンル理論など世界各地の文学を時代や文化を横断して概観する四巻シリーズの一冊として出版された。二〇〇四年のシンポジウムの参加者は、翌年より小さなグループを作って、世界の文学史を書く可能性を議論していた。京都滞在中の春、ウブサラに三日間の短い旅をしてそのメンバーと会い、具体的にその四巻本のかたちで文学史を書いてみようという計画の概要と組織について議論していた。それは『文学―世界史』というシリーズ名で近刊予定である。私はそのなかで時代を超えた日本文学史のテクストの担当となり、日文研滞在中は日本文学一般、特に二〇世紀文学についての理解を広め深めることに費やされた。

外国人研究員として私は一般向けの日本語のレクチャーと所内の木曜セミナーにて英語でレクチャーするのが任務だった。一般向けに適した話題は何かを考えたあげく、スウェーデン・フィンランド人の探検家・科学者のアドルフ・エリク・ノルデンシェルドと一八七九年に日本旅行について話すのに良い機会だと思った。その時彼は大西洋と太平洋を結ぶ北東航路の最初

の横断をなしとげたヴェガ探検隊のリーダーだった。これは京都で『源氏物語』の詩的な微細さや文学史記述の背後にある理論や思想について話すよりも、ずっと冒険的でスリリングな題材だった。ノルデンシェルドの一行は一〇月二七日に長崎よりスウェーデンに帰国の途につくまで八週間、日本に滞在した。その間、日本についての専門家の助けを借りて千冊、六千巻ほどの書物のコレクションを買い求めてスウェーデンに持ち帰った。彼は広い知の領域を代表する書物を要求し、法律、地理、言語学、文学、歴史、宗教、貨幣学、自然誌、医学、政治学のような分野から集められた。ヴェガ探検隊については立案、苦勞、成功、結果などいくらでも話すことがあり、非常に多くの観点からその物語が語られてきた。その時にはパワーポイントにあまり慣れていなかったが、日文研の有能なスタッフの仕事のおかげで質の高いパワーポイントを使うことができた。

二〇一三年には最初の三ヶ月と六週間の暑い夏に、今度は佐野真由子先生を受入教員に外来研究員として滞在した。この時には豊かな図書館の蔵書と親切なスタッフのおかげで、『文学―世界史』のための古典（八世紀から鎌倉時代終わりまでの）日本文学論を書くことができた。それは私の仕事のカギを担う部分だった。佐野先生とは二〇一二年、「日本研究」再考―北欧の実践から」と題された日文研海外シンポジウム・ユペンハーゲン大会で初めて知り会った。私の発表では「日本研究」を再考するというこの題名通りのことを文字通り正確に実践した。これは学際的な話題であるので、ある意味で流動的だ。だからこそ何をやり何を目的とするかを省察する必要があると私は考えている。

二〇〇四年に日文研に初めて滞在してから多くのことが起きた。特に図書館、そしてテクノロジーの発展に伴って進み続ける研究設備の改善は留まるところを知らない。スタッフは昔と

変わらずどの点をとつても有能で親切で絶大な助けとなってくれる。教員（特に教授）と事務レベルの男性優位は昔と変わらずあまり変わらない。二〇一〇年代が終わろうとする時代に、この男女差を続けることには何の弁解もできない。それは国際的な学術の世界では優秀性の証拠とはいえない。日文研が近い将来にこの点でも改善することを心より望む。ちょうど設備と図書館利用についてトップレベルで迅速で能率よいのだから。

何年にもわたる日文研での集中的な研究生活を送れたことは私にとって非常に大きかった。単に設備だけでなく世界の各地よりやってきた若い、またベテランの学者たちと講演、セミナー、社交の催しで接することができたことも大きな意味を持った。もちろん日文研ハウスのキッチンやテレビ・ルームでの気楽で気持ち良い雰囲気集まりは、今でも記憶に鮮明に残っている。オリンピックやその他の国際競技を見るときでも、二〇〇八年のオリンピック北京大会をハウスでみなと一緒に見たことを思い出す。開会式でスウェーデン選手団の入場だけでなくデンマーク、フィンランド、ノルウェーの選手団にも熱烈に拍手を送ったら、みんながぼかんとしたのを思い出してくすくす笑いだしてしまう。隣国にも拍手を送ったのは共通の歴史と文化的に非常な近しさを持っているからだと説明しようとしたが、二〇〇年以上戦争を経験していない国から来た者の状況や態度は例外的で、たぶん理解しがたいのだと気づいた。このエピソードから確信するのは、日文研が各国からの研究者にとってばかりでなく、日本と隣国の間の相互理解と平和な学術協力にとって重要な場所であるということだ。

（ストックホルム大学日本学部主任教授）